

アニタの内弟子奮闘記 その2

私が2度目に住込みの内弟子になりたいと願い出たのは、それが理にかなったことだと思えたからです。

私は月曜から金曜の9時から5時に英語を教えていましたが、新学期からの契約更新はせず、4月中に仕事をやめました。なぜなら前月3月の3カ月前に1級に合格し、黒帯に挑戦したかったからです。9月から始まる教員養成のコースの4カ月前にはイギリスに戻りたいと思っていたので、稽古の十分な時間をとるには、内弟子として3カ月半過ごせれば、審査に備えた最高の環境になると思ったからです。

内弟子になる前には、休暇が必要だとボーイフレンドがイギリスからやってきて、桜前線の通過とともに3週間“ゆっくり羽を伸ばして”過ごしました。

私は英語の先生として、あまりやる気のない女子学生に、自分を励ましながら必死で18カ月、英会話を教えていました。

雇い主の会社からも学校側からも十分なサポートをしてもらえず、たびたび一人ぼっちで孤独を感じていましたが、それでも教材作りや授業計画に多くの時間を費やしたので、生徒たちは会話のクラスで、そこそこ楽しんでくれたと思います。すごく印象的な授業だったかどうかはわかりませんが。

学校を去る時、数人の生徒が心のこもった「ありがとう！」の手紙をくれたので、ひどい先生じゃなかったんだとホッとしました。辞める前にわかっていたらと悔やまれてなりません。

仕事をしている間は、学校の外の社会生活を充実させることが、私の励みとなりました。越谷、小平、所沢の道場で週に何回か稽古を始め、道場の仲間たちとすぐに仲良くなり、楽しみを分かち合えたことで、孤独感が癒やされました。

小林道場の気風は、合気道とは人々がお互いに積極的に交流しあう手段であると考えられていて、これを基にコミュニティーができあがっています。

小林道場なしでは、ここまでやってこられなかったと思います。色々なお祭り（もちろん合宿も）が催されます。学校では日本の文化や伝統についていろいろ聞かされていましたが、私は道場を通して身をもって体験しました。



学校のスタッフは私のことを格闘技好きか何かと思っていたようですが、自分では、お祭り好きの方がふさわしい呼び名だと思っています。このような日常が自分を支えてくれました。孤独だと思ったり、実家に泣き言を言ったりするのが嫌だったからです。この点はイギリスの家族も海外で何とか仕事をしている私を温かく見守ってくれていました。私は2008年8月に6週間家に帰り再び日本に帰るときになって、家族がどんなに大切かを思い知りました。そこで2009年に日本を去ろうと心に決めました。道場の40周年記念の祝賀会のお手伝いをさせていただきかけたことと、黒帯をとりたかったので、それを区切りとし、もう12カ月滞在する事に決めました。

私は帰国までを何とか乗り切るための日課を直ちに実行しました。キッチンをきれいにし、使っているものをチェックし、最適な位置に収納、さらに“山積み”になった物の中から“どうしても必要なもの”を選び分けました。合気道のTシャツは毎日着替えても1ヵ月分あることがわかりました。ゴミブリ絶滅作戦を実行し、食べ残しはなくすようにし、今まで空いた時間にしていた洗濯を最初の仕事としてリストにのせました。

内弟子は気力と体力を試される仕事です。道場の生活に四六時中浸っているとバランスのとれた気持ちを維持するのは難しいことです。時間に制約され、体は少しでも休みたいと要求します。眠れる時間1分1秒が宝です。

最後の18カ月は週末に道場に滞在し、2年前は10週間の住込みの内弟子を経験しましたが、まだ十分だとはいえません。

日本を巡るととても楽しい3週間の休暇を過ごしたあとの内弟子生活ですが、その休暇はすぐにぼんやりとした遠い思い出となってしまいました。内弟子の生活は“今”が全てです。他の人たちには考える時間がありますが、内弟子にはありません。事の成り行きは予測できません。(最初にプランがあったとしてもです。)内弟子の仕事は、道場生に必要なことは何でも確認します。きれいな道場で十分な稽古ができるよう可能な限りのことをします。これら全てを完璧にやっても変更があったら再びやり直しです。



私は長期の外国人の道場生でしたが、かなり浮いていると思いました。私がどう見られているのかわらず、他の外国人が来るとほっとしました。仲間と仕事をシェアするとずっと気が楽でした。食べ物は別として！それでも内弟子は大変です。弟子にな

りたい人達の集まりはユニークです。多くはとても親しくなります。この仲間なしではこの2年間は乗りきれませんでした。



私は猛稽古を決意しました。でも日本に戻るチャンスを得たのに具体的にどうしたらよいかわかりませんでした。それで常に誘いを断らずにお受けして、沢山の先生とお会いしました。小林道場の先生、五十嵐先生、荒井先生、本部道場の先生。本当にためになる経験でした。それは小林合気道がどのようなものかをより鮮明に頭に描け、他の合気道のグループとの違いを知るいい経験となりました。

本部道場でやっている2つの朝稽古に行くには4時40分に起きなければなりません。行くべきか迷った時は、そこへ行く機会があり先生と稽古したいと思っている人がいても、「その誰もが稽古できるわけではないのだ。これは私にあたえられた特権なのだ。」と肝に銘じました。

高い段位の先生が繰り出す特殊な技を観察し、しっかりと分析できたかどうかは疑問です。不屈の努力の結果、もたらされた技の違いを述べるのは私には大変なことです。合気道に対する私の理解が浅いため、小林先生が八段たる所以がまだわかりません。先生は非常に多くを観て、経験なさっていらっしゃるのでも、先生個人については何も申し上げることができませんが、先生の内からにじみ出る寛容さ、他の人々にオープンであることは、私に多くを教えてくれました。先生は社会的因襲に束縛されていない自由な精神の持ち主ですが、人々についての詳細な情報は先生にとってとても重要です。先生はどんな年齢の人でも、白帯でも黒帯でも、わけ隔てなく全ての道場のメンバーと直接にコミュニケーションすることを大切になさっています。そして相手のレベルとか立場に応じて適切に対応されます。女神様はそこにいるだけでやさしい気持ちにさせて下さいます。こんなダイナミックでパワフルな人柄がなんであんな小柄な体に詰まっているのだろうと不思議に思います。内弟子は、朝稽古のあとの2階での朝食はもうなくなりました。女神様に毎週会えなくなって寂しいです。





今回の生活で、道場では全く男性優位であることがわかりました。道場のスタッフの間の先輩、後輩の関係はさらに明白で、居心地のわるい状況でした。個々に敬意を払うのは大切なことです。でも他の人が気まぐずい思いをしている時、どう取り繕ったらいいのかどきまきするのです。



私は同志愛に非常に支えられていたと思います。他の道場のメンバーともいつも仲良くし、何人かは稽古以外で一緒に時間を過ごしたりして、何物にも代えがたい貴重な思い出となりました。きっと将来の私の教え子に数々の思い出を話す事でしょう。

フルタイムの仕事や他にその人の生活があるにもかかわらず、稽古に励み道場の課外活動に貢献している多くの皆さんは、私のヒーローとなりました。

また弘明先生とそこご家族は、私を家族の一員として迎えてくれ、何から何までお世話になり、私の卵アレルギーにも細心の注意を払って下さいました。

去年の夏イギリスに戻った時、私は日本に留まることができないのだと気付きました。イギリスには自分が落ち着ける場所があり、そのことがいかに価値のあることかわかったのです。合気道の稽古は毎日から週2回になり、日本にいた頃からみると稽古は減りました。欲求不満な生活が続いていますが、これも希望する学校への配置が決まるまでと思っています。

イギリスではやる気のないティーンエイジャーのニーオトが増加し、クラスには破壊的で無関心な振る舞いの生徒が山ほどいると、私の指導教官が言っています。私は合気道で彼らを救えな



いかと考えています。

今、イギリスの私の家で思うと小林道場は、遙か遠い世界で今の私と何の関係もないように思えます。この西洋の片田舎の生活に埋もれるのは簡単だし、こことはあまりに違う他の世界を身近に感じたということをおぼえてしまうのも簡単なことです。それでも教師としての新しい仕事で、合気道を皆に紹介しようと思います。皆さんと過ごした私の経験が誰かのためになれば、私のしたことは無駄になりません。



最初の内弟子体験（2006年春に2ヶ月半）のあとイギリスに戻ってから2週間して、私は膝を壊しました。私はすみ落としの受け身で重心を崩して一瞬遅く落ちたのです。少し前まで何不自由なく動けて、自分のことは自分でできて、人に頼ることもなかったのに、次の瞬間には、その後治るまでの3カ月、回りの人に食事や飲み物の世話をしてもらって身になってしまいました。

私はじっとしてられないたちなので、起き上って雑用をしながらこれを書いています。動いている方が調子がよいのです。まったくじれったい時期でしたが、人生をどう過ごすか自問自答する時間を与えてくれました。何かほかにもっと中身のあることはできないか、具体的な行動

を起こすためのエネルギーをどう蓄えたらいいだろうかと思いました。それまでの景観設計の仕事は、殆どがオフィスの仕事で、一人でするデスクワークでした。最初の内弟子修行で、日々積極的に様々な人と直接に接して、自分がとても幸せを感じていることがわかりました。私は日本に戻って英語の教師として働き、小林道場で合気道の稽古に通う、それがなすべきことだという素晴らしい考えを思いつきました。粘り強く事を進め結局、茨城県取手に月曜～金曜、9時から5時の仕事を見つけました。私は家を出て2007年8月に東京に戻りました。

膝が治る間に教師の職が得られるかも知れないと思い、新しいキャリアの可能性として日本で教える事を幸運だと思っています。